

「ハイデルベルク・ストラスブール学生交流プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科1年 (嵐 大樹)

以下の内容は、国際連携文化越境専攻で、すでにドイツに留学中の学生の視点からのものである。

本年の派遣プログラムは、例に漏れず、新型コロナウイルスの影響を大きく受けたものとなった。それはまず内容において、「パンデミックと共に生きる：過去・現在・未来」というテーマ設定自体がまさにそうであり、また形式において、例年はもちろんオフラインで実施されていた欧州への派遣が、やはり新型コロナウイルスの感染拡大の状況の中で、オンラインでのものとなった。プログラムの具体的な構成としては、京都大学での事前準備講義の他、全てオンラインで、各学生の発表を中心とした、ハイデルベルク大学との英語でのワークショップが3時間、ストラスブール大学との日本語でのそれが2時間×2回というものであった。その間、食事会のような、学生同士でラフに交流する機会も設けられた。

それぞれの発表の内容に関しては、ペストやスペイン風邪といった過去の感染症についてのものから、日本における癩文学、台湾の行政によるパンデミック対応、新型コロナウイルスの呼称にまつわるステレオタイプ、非常事態下の日本における留學生の生活への影響など、空間的にも、時間的にも、そしてアプローチの方法としても、非常に多岐に渡るものであった。それゆえ、凡庸な表現ではあるが、アクチュアルなトピックに関して、普段は触れることのないようなテーマや視点に接することができ、刺激になった。

しかし、それ以上に価値があったと思われるのはやはり、国際的な場において、自身の関心に従った発表を行ったり、他の学生の発表を聞いたり、質疑応答やディスカッションなどで交流したりといった機会それ自体である。確かに本年のプログラムは全てオンライン開催であり、実際に欧州に派遣されていた例年と比べて大幅に内容は縮小したのだろうが、たとえこのような形式であっても、参加することで得られる大きな価値はあったと思う。というのも、人文系の学生にとって、そのような機会は滅多にないように感じられるからである。例えば、京都大学からの学生には学部1年の方もいたが、もし自分がそのような大学生生活の初期において上記のような経験を積むことができているならば、その後の大学生生活への姿勢は相当程度変わったものになっていただろうと思う。したがって私は、すでに海外や学問への志向を固めている学生はもちろんとし、まだぼんやりとしか留学ないし何らかの海外経験を考えていない学生、さらには、そういったことを全く考えたことのない学生にも、自分の視野を大きく広げる機会として、本プログラムの利用を考えてみてほしいと個人的には思う。

「ハイデルベルク・ストラスブール学生交流プログラム参加報告書」

京都大学文学部・文学研究科3年 (杉村文)

私が今回のプログラムに応募した直接の動機は、「Living with Pandemics : Past, Present, Future (パンデミックとともに生きる: 過去、現在、未来)」という大テーマが、数年来勉強を続けていた医学史(病と人間の歴史)と深く関わるものだった、ということでした。これまでは実際にハイデルベルクとストラスブールを訪問していたのですが、今回は「新常態」に即したオンライン開催となりました。訪問の機会が得られなかったのは残念ですが、画面越しとはいえ、久しぶりに本格的な国際交流を体験することができました。

プログラムの参加者は京大側が3人と少なめでしたが、相手校側は、各回オンラインならではの「飛び入り参加」も含めて参加者が予想以上に多く、記念撮影のときにはZoomの画面は、世界各地でワークショップに参加している人たちの笑顔でいっぱいになっていました。スケジュールとしては、2月初頭の京大側の顔合わせと事前勉強会を経て、2月25日のハイデルベルク大学との交流ワークショップがあり、参加者による英語発表と質疑応答が行われました。ストラスブール大学とのワークショップは2回あり、3月5日は自分の興味のあることや好きな料理を紹介し合うZoom食事会と参加者の日本語発表、3月12日は後半部の発表と討論が中心でした。

今回は現地訪問の部分が省略されたため、プログラムの中の発表の比重が従来よりも大きくなっていました。事前勉強会でテーマを決め、初回までの約3週間の間に英語発表用の資料(スライド)を準備しました。英語プレゼンと聞くとハードルが高く感じられるかもしれませんが、プログラムを通じて、コーディネーターのKamm先生がいつも細やかなコメントやアドバイスをくださり、語学面も含めて手厚くサポートしてくださいます。ですので、実際には、自分の関心をプログラムの大テーマと結びつけてテーマを決め、15分以内のプレゼンを作る作業が事前準備のほとんど全てを占めます。私の場合は、書いたばかりの期末レポートを元に、「The Past and Present of Leprosy Literature in Japan (日本における「癩文学」の過去と現在)」と題した発表を行いました。最初にハンセン病患者隔離の歴史を概観した上で、「癩文学」という「特異」な文学ジャンルが形成される過程をたどり、「癩文学」と「ハンセン病文学」を関連付けた問題提起で締めくくりました。工夫としては、浮世絵・アニメ・新聞記事・肖像画・地図など多様な視覚情報を入れたり、「翻訳」という視点を取り入れて、「グローバル」や「越境」といった、本プログラムともなじみ深い概念を想起させるエピソードを付け加えたりしました。また、ストラスブール大学との交流ワークショップでは、共通言語が日本語であったため、事前に新しく日本語版のスライドを作る必要がありました。私の場合、発表のテーマが少し特殊だったため、前もって語彙リストを送らせてもらい、スライドは英語とのバイリンガル形式に作り直しました。

今回は全体的に現在進行形のコロナ・パンデミックを扱う発表が多く、参加者の時事的・社会的な関心を反映した内容で、いずれも興味深く拝聴していました。ハイデルベルク大学との交流会では、参加者の出身国の報道や、コロナ下の東アジアでの留学やインターンなど実体験を組み入れた、現地からの「生の声」を伝える発表が中心で、みなさんの英語プレゼンの上手さにも感銘を受けました。ストラスブール大学の日本学学科の方たちは、日本語での発表を入念に準備されており、歴史上のパンデミックを題材にするなど、それぞれの専門分野の知見や視点を活かした内容に、また違った面白さを感じました。私自身、多様な参加者の方たちから、質疑応答の時間にコメントや励ましの言葉をいただくことができ、本当に勉強になることばかりでした。大学院生の参加者が多かったため、ヨーロッパにおける大学院以降の研究や生活の様子を垣間見ることができたのもよかったです。

今回のプログラムは、オンライン開催という性質上、文化体験や観光、学生間のプライベートな交流というよりは、発表とそれをめぐる議論が中心となり、実際、過去の参加者から、普段よりも随分と「真面目」な内容みたいだね、という感想をもらったこともあります。いろいろな点で通常通りではなかったとは思いますが、私にとっては、久しぶりに大人数の学生で集まって交流する機会を持つことができたのは、本当に貴重な体験でした。元々修士課程進学

後の留学を希望していましたが、今回のプログラムを経て、留学先や研究計画がより具体的にイメージできるようになり、今度は英語や日本語に頼らず、フランス語やドイツ語など現地の言葉を使って交流し、議論したい、というモチベーションも生まれました。加えて、他の参加者の方が、プレゼンや議論の際に、自分の考えや研究内容を発信することに大変長けておられる様子を見てみると、「インプット」型の勉強と並行して「アウトプット」の経験を積んでいく必要性が痛感されました。

もう一つ、これは常々外国人の方と交流する際に感じていたことでもあります。ワークショップを通じて、やはり、日本については、実際には「専門外」であったとしても、本当によく知っていなければいけない、と感じました。私は卒業論文執筆に向けてフランス植民地主義の歴史を勉強していますが、一般の方であれ、フランス史などの研究者の方であれ、「日本ではどうなのか／どうだったのか」ということをさかんに尋ねてこられますし、東アジア、ひいてはアジア全体にまで質問が広がることも珍しくありません。その意味では、一見逆説的ですが、今後海外に出ていくからこそ、少なくとも自分の専門と関係する分野については、日本のことにもしっかりと通じておく必要があるのではないかと考えています。「日本」をどこかで意識しながら研究を進めていくことの重要性を再認識し、日本史（や日本の植民地主義の歴史）と日本近代文学（や植民地文学）への関心がいつそう高まったことも、プログラムに参加して得た収穫の一つです。コロナ禍で国内にとどまっている状況が、制限ではなく、研究を別の角度から発展させる可能性と捉えられるようになると、何もかもが俄然面白くなってきました。勢いに乗って先日長島愛生園を訪れ、初めての国内での資料調査の一人旅を経験することもできました。

次年度以降も、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学との交流プログラムは継続して実施されると思いますし、参加経験者として、ぜひそうあってほしいと願っています。国際交流や留学に関心のある方、ヨーロッパに興味のある方など、いろいろな方の幅広いニーズに応えるプログラムです。参加者がそれほど多くない分、コーディネーターの先生を中心に、それぞれの希望や関心をくみ取って、細やかに、柔軟にサポートしてまいります。海外の参加者だけでなく、文学部・文学研究科の学年や専門の異なる参加者と交流できるのも魅力です。繰り返しになりますが、文学部主催の「公式研修」の様相を呈している分、参加に際してのハードルが高いように感じておられる方もいらっしゃるかもしれませんが、内実は、どんな方でもすぐに入ってゆけるような、良い意味でとても「ふわっと」したプログラムです。もちろん、本格的な「ミニ研究発表」をしたり、将来を見据えての「プレ留学」と位置付けたりと、戦略的に活用するのも面白いと思います。

最後になりましたが、プログラムの企画・運営に携わってくださったコーディネーターやスタッフのみなさま、そして、一緒にプログラムに参加したみなさんに心からの感謝をお伝えします。本当にありがとうございました。

「ハイデルベルク・ストラスブール学生交流プログラム参加報告書」

京都大学文学部1年 (齊藤ゆずか)

本プログラムは、担任の先生から1回生に向けて送られたメールで知った。海外への渡航がままならない一年を過ごしたものの、留学や国際交流で自分のまだ見えていない世界を知ることの憧れのあった私は、すでいくつかのオンライン交流を経験していたが、ヨーロッパの大学は初めてだった。

英語力などの面での不安はあったが、人の移動や現代史に関心のある私は、ドイツやフランスの学生たちの関心や考え方を知りたいと思った。また、流行の長期化に伴い、コロナウイルスが世界にもたらしているものと、それに対する人間の反応について立ち止まって考える機会が減少していると考えていたため、テーマが「パンデミック」である今回のワークショップへの参加を決めた。

プログラムはハイデルベルク大学と1回、ストラスブール大学と2回の計3回、zoomを用いて行われた。内容は双方の学生によるプレゼンと質疑応答、食事交流会、総合討論だった。私はパンデミックで日本にいる外国人留学生在がどのような影響を受け、困っているのか、それに対してどのような行動が大切なのかについて、アンケートとインタビュー調査の結果から話をした。

私にとって自分の調べたことを、海外の学生に向かって英語で発表する経験は初めてだった。自分の伝えたいことを的確に伝えるにはもっと経験が必要だし、積極的に機会をつかんでいきたいと思うようになった。また、英語で質問を受ける機会もあり、調査対象に偏りがあるのではないかと、などの指摘にはどきどきしたが、率直な意見を聞くことができ、その場で拙くも対応できたことは自分の自信になった。

他の人の発表を聞くことも非常に良い経験だった。日本側からは自分以外に2人参加されていて、それぞれ「ポピュリズム」「ハンセン病文学」のテーマでの発表だった。パンデミックというとコロナウイルスを連想してばかりだったが、それに対して人々が政治に何を求めるのか、過去の感染症に対する差別が今につながっているのではないかと、という新しい視点ももらった。上回生がどのように研究発表するのかを目にする機会も、特に今年はほぼなかったもので、自分の来年度以降の目指したい姿として見ることが出来て良かった。ドイツ・フランス側の発表も興味深く、特に印象的だったのは台湾・韓国など東アジアへの関心が強かったことだ。日本の現代史を専攻し、研究テーマにしている学生もいて、私は日本の現代史に進めばそうそうヨーロッパの人々と繋がる機会はないと思い込んでいたが、それが誤りだったと気づかされた。

今回の交流が自分にとって有意義で楽しいものであったため、来年実際に渡航できるのであればぜひ参加してもっと長い時間にわたって意見交換をし、現地の街の様子なども見てみたい。周りに経験した人がおらず、遠くなりかけていた留学という選択肢が視野に入るようになったことも、今回のプログラムに参加してよかったことだと思う。本プログラムに携わった全ての方に感謝している。